

患者さんとそのご家族が希望を持って生きられるために

エーザイ株式会社 東京医薬九部

佐々 雄一

社員手帳をめくってみると、定款に“本会社は患者様と生活者の皆様の喜怒哀楽を考え、そのベネフィット向上に貢献することを企業理念と定め、この企業理念の下ヒューマンヘルスケア(hhc)企業を目指す。”との記載がある。定款にこのような理念を盛り込んでいる企業は少ないのではないだろうか。

私は医療に貢献し、病気に苦しんでいる患者様に希望を与えたいという思いから2005年にエーザイに就職を決めた。そして弊社の国内唯一無二のアルツハイマー型認知症治療剤を通して、認知症に苦しむ患者様やご家族の方に、5年後・10年後への希望を持っていただくために必要なお薬をお届けすることを私の使命として仕事に取り組んできた。今ふと手帳を見直して、自分の判断は間違っていなかったと実感する。本論文では、新人として配属された地での2年間の活動において、アルツハイマー型認知症を診ていく地域医療連携システム作りを通して、MRになって良かったと実感できたことを述べる。

アルツハイマー型認知症を治療していく上での大きな課題は早期診断といった点にある。認知症早期の段階から服薬を開始することが、薬剤の効果を最大限に発揮するためにも非常に重要である。しかし、いわゆる「物忘れ」といった症状は、患者さん及びご家族にとって病気という自覚は少なく、またそれを病気として自信を持って診断できる医師が少ないというのも現状であった。それを抜本的に解決していくための方法として、私は地域医療の中で診療連携のネットワークを構築し、先生方が相談を受けた際に、ご自身で診断が難しい患者さんはどこに紹介すればよいか、診断確定後のフォローはかかりつけ医の先生にさせていただき流れ、患者さんとしてどこのクリニックに相談に行けばよいかをわかりやすく提示できるシステム作りができないかと、毎日十数名の先生方と面談しディスカッションを重ねた。まずは認知症と向き合っていく上での疑問点や問題点を積み上げることから始め、自治体単位でそれを解決できる勉強会を実施できないか医師会と打ち合わせを行った。早期診断の方法や連携先とのコミュニケーションといった内容を盛り込んだ勉強会の実施は先生方からも非常にニーズがあることを熱く訴えたところ、医師会学術担当理事も前向きにこの提案を受け入れていただくことができた。

そして05年末頃から次第に年に数回といったペースで定期的に勉強会を開催できる運びとなり、地域中核病院とかかりつけ医との紹介・逆紹介の流れが徐々にでき始めた。

こういった会を重ねていくにつれて、医師会にもネットワーク作りを推進していきたいという我々の熱意が伝わり、次は医師会として市民向けに発信するものがないかと議論を進めるようになった。そこで議題に挙げたのが、医師会のホームページから物忘れに関する相談を受けられる医療機関をリスト化できないだろうかというものであった。医師会公式のホームページに特定のクリニック名を載せると宣伝効果云々の問題もあり物議を醸したが、患者さんは何を羅針盤に相談を持ちかければよいのか、患者さんの立場で考えたらどうでしょうといった部分に共感を頂き、物忘れの相談を受けられる医療機関のリスト化が現実のものとなり、現在では医師会のホームページから市内の地域での絞り込み検索ができるようなシステムを組み込むことができた。

こういった活動を地道に続けてきたことにより、先生方とディスカッションを重ねる中で「家族の方から相談があって薬の処方を開始したが、50歳代の会社役員の夫が仕事のクオリティを維持したまま定年を迎えることができたと感謝していたよ」「うちで判断できないような患者さんを〇〇病院に紹介したら、脳の画像を撮ってもらえて早い段階で認知症が見つけたよ」などの声をいただける機会が増えてきた。実際に私の耳に入ってくる患者さんの反応はごく一握りの数に過ぎないが、患者さんに希望を与えるために認知症を相談できる地域医療作り、連携の提案やシステム作りに邁進してきた上での結果がこういった形で先生方から伝えていただけ、仕事を続けてきて本当によかったと実感できた。

医療に貢献し、病気に苦しんでいる患者様に希望を与えたいという思いは現在も何一つ変わることはない。この思いを胸に、今後もMRとしての社会貢献を一つ一つ遂げていきたい。

(MR経験 4年)